『東西南北2010』発刊にあたって

『東西南北2010』をお届けします。

先代の山村睦夫所長から引き継いで、はじめての号ということになります。

打ち明けていえば、私はこれまで『東西南北』のあまり良い読者ではありませんでした。それというのも、自分の専門領域やそれにかかわる人文・社会諸学の論考には目を通すものの、教育学や経済・経営学関係の論文についてはほとんど風馬牛できてしまったからです。

ところが、今回は役目がら掲載論文のすべてを否応なく再読、三読しなければならない瀬戸ぎわに立たされたわけです。そして、いまさらながらに、これまでのおのれの不明を思い知らされ、あわせて総合雑誌編集の醍醐味を存分に満喫したのでした。

ここにはさまざまな知のいとなみが凝縮されたかたちで展開し、相互に連関しています。

自画自賛にも似たこと挙げのようですが、そうした興奮に駆られているところです。

「ご用とお急ぎでない方は」／「ご用とお急ぎの方も」個別のシンポジウムやプロジェクト報告をお読みいただくだけでなく、ぜひとも隣の垣根も、そのまた隣の芝生も覗いていただければと思います。

本号は２本のシンポジウムのほか、各研究プロジェクトの報告その他で成り立っていることは、これまでの号と変わりがありません。研究所の公開シンポジウム「島の想像力」の討議の場が湛えていた静かな知的熱狂を追体験していただければさいわいです。

しかし、本号には従来の号とは異なった面もあります。それというのも、もうひとつのシンポジウム「流域主義」は研究所の研究プロジェクトの成果であるとともに、文科省のGPの成果の一端でもあるからです。

同様なことは、ワークショップ「幼小接続」についてもいえます。これもまた、和光大学があらたに立ち上げようとしている幼児教育養成コースのための助走だからです。

学園内の幼・小・中・高に連なる学習主体の形成を追う論も、ムーブメント教育の実践報告も、さらには中国人留学生教育、スリランカ、バローチスタンなどのレポートも、それぞれが独立した個別の問題関心のように見えながら、その実、これからのプロジェクト活動の指標だったり、過去の研究プロジェクトの実りだったりします。

研究所の共同研究活動が学内の各方面に胎動し、伏流している学問的諸欲求や教育実践とも相互乗り入れをすることで、本号は編まれているということです。

こうした動きを反映する意図もあって、あらたに過去の研究プロジェクトの成果としての刊行図書のブックレビュー欄をあらたに設けてみました。この欄が途絶えることなく、いやましに栄えていくことを願っています。

和光大学総合文化研究所所長　塩崎文雄